

阿蘇草原再生にまつわるイラスト集 イラストリスト

	タイトル	補足説明
1	カルデラ成立から人が関わるまでの阿蘇	巨大噴火（火砕流は山口県まで到達）後の陥没による世界最大級のカルデラ形成から、その後の氷河期によって樹林化が進まず、草原が維持された状態までを、時系列で表したものの。
2	人が関わり始めたころの阿蘇	カルデラ湖が形成されていた頃の阿蘇の姿。外輪山上での生活や狩猟（巻狩）などが行われていたことを表したものの。
3	阿蘇草原の恵みを活かした伝統的な土地利用	牛馬を利用した農業生産と草資源の循環によって、阿蘇カルデラ上に草原－森林－集落－水田の垂直的な土地利用が展開され、阿蘇を特徴づける景観が形成されるとともに、草原の恵みを活かす知恵と技術、文化が育まれてきたことを表したものの。
4	草原の種類と阿蘇草原の特性	人が関わり続けることで維持される「半自然草原」であるという阿蘇草原の特性を、タイプの異なる草原と比較して表したものの。
5	日本国内の半自然草原の面積比較	日本国内にある半自然草原の面積上位5箇所を比較し、阿蘇草原が、国内最大の面積を有していることを表したものの。
6	阿蘇草原の生物多様性 ①	採草、放牧等の様々な土地利用がなされることで、豊かな草原の生物多様性が育まれることを表したものの。植物は約600種（レッドデータブック掲載種は86種、大陸系の遺存植物なども含む）が生育し、チョウ類は109種（熊本県産117種のほとんど）が生息し、「チョウの楽園」とも言われる。
7	阿蘇草原の生物多様性 ②	オオルリシジミの生活史と牧野活動の年間スケジュールを並べ、人が適切な活動をしないと生息できない生物が存在している、つまり、人の関わりが草原の生物多様性保全にとっていかに重要かを表したものの。
8	阿蘇草原の水源涵養機能	草原の水源涵養機能が優れているメカニズムを表したものの。ススキの蒸散量が、スギ・ヒノキと比較して小さいため、ススキ草原は森林と比較して、水資源の涵養機能が大きく、阿蘇草原が九州各県に供給する水資源量は、486万人（※）の年間水道使用量に相当する。 (※)草原の水資源涵養量×野草地面積÷1人当たりの年間水道使用量＝2,570mm×14,750ha÷78m ³ /人＝486万人
9	九州の水がめである阿蘇	阿蘇に源流をもつ6本の一級河川の水から、各地の産業やくらしがどのような恩恵を受けているかを表したものの。

10	白川流域の水とくらしを支える阿蘇	<p>河口付近でのノリやアサリの養殖、地下水で100%賄われる熊本市内の水道水、中流域への工場の立地などといった白川中下流域の豊かな水・くらしを、阿蘇カルデラが支えていることを表したもの。阿蘇カルデラから熊本地域の地下水に供給される水量は、109万人分（※）の年間水道使用量に相当する。</p> <p>（※）（立野火口瀬を流れる地下水量＋白川中流域で、阿蘇カルデラから流れる白川の水を使うことで地下に涵養される量）÷1人当たりの年間水道使用量＝ $(1,500\text{万m}^3/\text{年} + 7,000\text{万m}^3/\text{年}) \div 78\text{m}^3/\text{人} = 109\text{万人}$</p>
11	阿蘇草原の炭素固定機能	<p>野焼きが継続的に行われることで、野草の根などの分解物や、野焼き後に残る炭由来の炭素が、土壌中に蓄積され続けていることを表したもの。阿蘇郡市の全世帯が1年間に排出するCO₂の1.7倍相当（※）の量を固定している。</p> <p>（※）野焼きしている草原土壌の炭素固定速度×野焼き面積÷1世帯当たりのCO₂排出量÷阿蘇郡市の世帯数＝$6.9\text{tCO}_2/\text{ha}/\text{年} \times 16.912\text{ha} \div 2.72\text{t}/\text{年} \div 25,000\text{世帯}$</p>
12	阿蘇草原の減災機能	森林と草原の土砂崩れ時の被害を比較したもの。植林地が崩れた場合に、土砂と樹木が併せて崩壊し、被害が甚大化する危険性が高まる一方、草原の場合は崩壊土量が少なく、被害は小さく済むことが知られている。
13	草原が管理されなくなるとどうなるか	適切に管理されず藪化した草原と、適切に管理されている草原を対比して表現。景観上の変化だけでなく、木々に覆われて地面が暗くなり、草原の豊かな生物多様性も失われてしまう。
14	守るために自分ができること	阿蘇の草原を将来に引き継いでいくために、一人ひとりにできることを表現。野焼き支援ボランティアへの参加、募金への協力、あか牛料理の食事、草原アクティビティの体験など、様々な関わり方がある。